

第六章 八 衢 ( 街 ) の 光 景 ( 六 )

ここは黄泉の八衢(八街)という所で(あって)米の字形の辻である。その真中に一つの霊界(幽界)の政庁があつて、牛頭馬頭(牛頭馬頭)の恐れ番卒が、猛獣の皮衣(皮衣)を身につけたのもあり、丸裸に猛獣の皮の褌を締めこみ、突棒や、手槍や、鋸(鋸)や、斧、鉄棒に、長い火箸などを携えた奴が沢山に出てくる。自分(王仁)は芙蓉仙人の案内で、ズット奥へ通ると、その中の小頭ともいうような鬼面の男が、長剣を杖に突きながら出迎えた。そして芙蓉仙人に向つて、

『御遠方の所はるばる御苦勞で(ありま)した。今日は何の御用にて御来幽になりましたか』

と恐れ顔に似合わぬ慇懃な挨拶をしている(である)。自分(王仁)は意外の感にうたれて、両者の応答を聞くのみであった。(そうすると)芙蓉仙人は一礼を報いながら(から)、

『(神界の)大神の命により大切な修業者(神人)を案内申して参りました。すなわちこの精霊(御方)であります。今回は現、神、幽の三界(改革の)使命を帯び、第一に幽界の視察を兼ねて修業にきたのです(修行に見えたのであります)。この精霊(方)は丹州高倉山に古来秘めおかれまして、三ツ葉躑躅の靈魂です(神霊であります)。何と

黄泉の八街……黄泉は地獄のことですから、その八街といえは随分と見苦しいところでしょう。

三ツ葉つじの神霊……出口王仁三郎聖師の靈魂のこと。

ぞ大王(たいおう)大王(たいおう)にこの旨御伝達をねがいます(う)』

と、言葉(ことば)言語(げんご)に力をこめての依頼であった。小頭(こがしら)は仙人(せんじん)王仁(わたり)に軽く一礼(いちれい)して急ぎ奥(おく)にへ行った。待つことやや少時(しばし)、奥(おく)には何事(なにごと)の起りしかと思(おも)わるばかりの物音(ものおと)が聞(き)ゆる。

(ので、)芙蓉仙人(ふようせんじん)に、

『あの物音(ものおと)は何ん(なに)でしようか』

と尋(たず)ねてみた。(聞(き)いて見(み)ると、)仙人(せんじん)はただちに(い)曰(いわ)く、

『修業者(しゅうぎょう者)の(神人(しんじん))来幽(らいゆう)につき準備(じゅんび)せむがためである』

と答(こた)えられた。(と、)自分(じぶん)(王仁(わたり))は怪(あや)しみて、

『修業者(しゅうぎょう者)とは誰(たれ)ですか(神人(しんじん)とは誰(たれ)ぞ)』

と問(と)う。仙人(せんじん)は答(こた)えて(い)う(答(こた)えて曰(いわ)く)、

『汝(なんじ)のごことだ。(瑞(みづ)の身魂(みたま)なり、)肉(にく)体(たい)ある精霊(せいりやう)、(人(ひと))幽界(ゆうがい)に來(きた)るときは、いつも内(ない)の模(も)様(よう)を一時(いちじ)変更(へんこう)さるる定(さだ)めである(なり)。今日(きょう)は別(わ)けて、神界(しんがい)より前(まえ)もって沙汰(さた)な

かりし故(ゆえ)に、幽庁(ゆうてい)では(要(よう)するに幽庁(ゆうてい)は、)狼(ろう)狼(ろう)の体(たい)と見(み)える(なり)』

と仰(おほ)せられた。(王仁(わたり)は問(と)うて曰(いわ)く瑞(みづ)の身魂(みたま)とは誰(たれ)ぞや、)答(こた)えて曰(いわ)く、汝(なんじ)の守護神(しゆごじん)なり。茲(こゝ)に於(お)いて初(は)めて王仁(わたり)は、我(わが)本守護神(ほんしゆごじん)を知(し)ったのであつた。(しばらくありて)静(しず)かに隔(へだ)て

の戸(と)を開(ひ)いて、前(まえ)の小頭(こがしら)は先導(せんどう)に立(た)ち、数名(すうめい)の守卒(しゆそつ)(役員(やくいん))らしきもの(と)共に(とも)出(い)できたり、軽(かろ)く二人(ふたり)に目礼(めくれい)し前後(ぜんご)に附添(つきそ)う(い)て、奥(おく)へ奥(おく)へと導(みちび)きゆく(のである)。(上段(じやうだん)

大王……幽界の政庁の大王で、次の七章に書かれてあるように出口開祖のお靈魂とあります。

本守護神……人間の内底に潜在せる正しい靈魂で、自己の根本精神ともある。人間の内分が神に向かつて開け、ただ神を愛し、神を理解し、善徳を積み、真の智慧を輝かし、信の徳にあり、外的の事物にすこしも拘泥せざる状態を靈主体従といい、かのごとき人はいわゆる地上の天人にして生きながら天国に籍をおいている者で、この精霊を称して本守護神という。

の間には白髪異様の老神(老人)が、机を前におき端座したまう(て居る)。何となく威厳があり且つ優しみがある。そしてきわめて美しい面貌であった。

芙蓉仙人は少しく腰を屈めながら、その右前側に坐して何事か奏上する様子である。判神(役人)は綺羅星のごとくに中段の間に列んでいた(居る)。老神(老人)は自分(王仁)を見て美わしき慈光(顔)に、一層美しき光り(を)をたたえ笑顔を作りながら、

『修業者殿(瑞の身魂殿)、遠方大儀である(なり)。はやく是に』

と、老神の(自ら)左前側に自分(王仁)を着座しめられた。老神と芙蓉仙人と自分

と(三人)は、三角形の陣をとった。自分(王仁)は座につき老神(老人)に向って低頭平

身敬意を表した。老神(老人)もまた同じく敬意を表して頓首したまい(告げたまわく)、

『吾は(我)根の国底の国の監督を天神(天)より命ぜられ、三千有余年当庁に主たり、

大王(大王)たり。今や天運循環、いよいよわが任務は一年余にして終る。余は汝と

もに靈界(神界)現界において(出で)相提携して、以て宇宙(改造)の大神業に参加

せむ。しかしながら吾(我)はすでに永年幽界を主宰したれば今さら幽界を探究するの

要なし。汝は今はじめての来幽なれば、現幽両界のため、実地について研究(の試験)さ

るの要あり。しからざれば今後において、三界(現界)を救うべき大慈の神人たること

を得ざるべし。是非々々根の国、底の国を探究の上帰頭あれよ(帰現されよ)。汝の(が)

産土の神(大神)を招き奉らむ』

左前側……右前側は下座であり、左前側は上座の意味です。つまり大王は聖師のみ魂を上座に着座せしめられたということと。

頓首……頭を地につけて敬意を表すと。君主に対して行う礼式。

大慈の神人……救世主たる出口聖師のこと。

産土の大神……小幡神社の祭神。開化天

とて、天の石笛の音もさわやかに吹きたてたまえば、忽然として白衣の神姿、雲に乗りて降りたまい、三者(三人)の前に現われ、叮重(丁重)なる態度をもつて、何事か小声に大王(大王)に詔(の)らせたままい、つぎに幽庁(ゆうてい)列座(れつざ)の神(かみ)庁(ちやう)の数多(あまた)の列座(れつざ)にむかい(て)厚(あつ)礼(れい)を述べ、つぎに芙蓉仙人(ふようせんじん)に對(たい)して、氏子(うじこ)を御世話(おせわ)であつたと感謝(かんしゃ)され、最後(さいご)に自分(じぶん)王(わ)仁(に)にむかつて一巻(いっかん)の書(しよ)を授(ま)けたまい、頭上(ずじやう)より神息(しんそく)を吹きこみたまつや、自分(じぶん)王(わ)仁(に)の腹部(ふくぶ)ことに臍下(さいか)丹田(たんでん)は、にわか(あたら)に暖(ぬ)か味(み)(さ)を感(かん)じ、身魂(みたま)の全部(ぜんぶ)に無限(むげん)無量(むりやう)の力(ちから)を与(あた)られたように(得(え)たるを)覚(おぼ)えた(のである)。

瑞 月

世の為に生れ来し身ぞ苦しけれ

ひとり千座の置戸負ひつゝ

悪人を標準として造りたる

お規定(きぎて)の道(みち)の狭(せま)苦(くる)しきかな

皇の靈魂のことです。  
天の石笛……神界では一番に尊い樂の音  
だと言つことです。